

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 8 号

発行日
2023. 7. 30
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

〇ふと思つた？我が書きモノの行く末？！

既に承知されている人も思うが、別途HP上にアップしている「ID問答(内なる対話)」「意味ある世間話」となるや、否や!!」も、一応「了」という形で、過日、締めを行った！自らの内に、二人の人間を操り(ある意味「遊び心」からであるが、そればかりではないことは、分かる人には、分かってもらえているはずであるが?)、世の出来事や、自分(達?)なりに、これは書き留めておかなければと思つたことを、まさに対話形式(ダイアログ)で、書き綴ってきたものである！

ちなみに、そこでの記事(①～⑩)は、「総集版」として、改めて、HP上にアップするつもりである(昨日22日にアップした！古いのを合わせれば、今回の分は第3弾ということになるが、興味のある(余裕のある)人は、通しで、(再び?)読んで欲しいものである！

なお、もう一つの「新・教育協働への道」も、一応は、次のステージ(⑪)に移つてはいるが、そこでも、何故か「(つづく?)」という、怪しげな表記で終わらせている！「いつ止めてもいい？」という思い(覚悟?)を、そこに忍ばせているが、これについては、もう少し成り行きを見てということではある?!

いずれにしても、こちらの『岳陽』と共に「が、二人(私井上と堂本氏)の共作としては、最後のもの?というところになるわけであるが、記憶力と思考力(遊び心も?)の減退(消失?)に抗うための良策であることは言うまでもない!!果たしてどうなるか?暑い夏ではあるが、当面は(下肢の不調にもめげず)、書き続けていくことになる!」

〇ふと思つた？我が書きモノの行く末？！

ところで、ここで、ついでと言つたら、少し複雑ではあるが、最近、偶にはあるが、HP上にアップしているものを改めて、これまでの、私の書きモノ達は、いつ、どのように処分? (笑)されるのだろうかと思つて、思ふことがある!

本や紙の資料等(既に、かなりの分は処分しているが!しかし、何故か?古代史関係は、嫌というほどある!)は、たとえ私が処分しなくても(出来なくなつても?)、目に見えるわけではあるので、誰か(私の奥さん?もしくは、娘達?)が処分してくれるとは思ふが(ただし、どう思ふいでやるのかは別問題?...笑?)、パソコン本体やUSBの中の書きモノ(データ)は、別である?!

ちなみに、私以外の人達(昔の人達?)は、そういう心配?もなく、後に続く家族、あるいは所縁の人によつて、篤く保管されるか(例えば、〇〇文庫として?)、図書館への寄贈という形で処遇されることではあるが、私のモノ達は、そういうわけにもいかない(要は、他の人達にとっては利用価値がない?所在も、バラバラ?)!!

ということ、いとも簡単に、処分(廃棄または焼却)されているかもしれないということであるが(冷静に捉えれば、残される側にとっては、懐かしくはあつても、実際には厄介な代物となる?)、パソコン上のものは、私自身の生き様(世間的に言えば、道楽?)を示しているものであるので、こちらの方は、いつの日か(決断の日?)、自らで消せればと思つてはいる?!!そういうことである!」

〇とんでもない若者達?そこにあるのは、異次元の世界?!

急遽、ここでは、違つた話題にすることにしよう!用意していたものがあつたのだが(これについては、いつかまた取り上げる予定である?)、この感激(否、むしろ驚き?)否、それ以上?)を忘れてはいけないとも思ふ、見出しのテーマとした次第である!まず、そのテーマからしたら、やはり、あの大谷翔平のこと

であろう(まだシーズン途中ではあるが?)!!かのWBC(ワールド・ベースボール・クラシック)での活躍はもちろんであるが、その後のシーズン・プレイ(三刀流)についても、何とも言えない活躍(雄姿?)である(もちろん、こんな表現では生ぬるい?)!ただし、ここで書き記しておきたいことは、実は、そういうことではない!大リーグで活躍している(した)選手は、あのイチロー選手を始め(凄い記録も残している!)、数多くいる!まさに、彼らも、とんでもない若者達なの(だったの)である!しかも、そうした若者達は、様々な種目・分野で、無数にいると言えるのである(もちろんスポーツ以外でも?)!

しかし、やはり、あの大谷翔平選手は違つた!否、突然ではあるが、あの将棋の藤井聡太七冠もそうである!否々、一番ホットなところで言えば、先日の、VNL(バレーボールネーションズリーグ)での、日本チームキャプテンの石川祐希選手もそうである!!では、改めて、彼らは、何が違つたのか?

もちろん、その答えは、人によつて異なるであろうが、私がここで言いたいことは、彼らの活躍(実力?)は、他の人がどれだけ頑張つても、その域には、おそらく達することが出来ない?それくらい、異次元の活躍(実力?)なのではないかということである(ただし、そこには、恵まれた体と頭脳があり、そしてまた、それに劣らぬ鍛錬(意志も含めて!)があつたのであろうが?)!!しかも、何より、自らが自らの世界(時空)を楽しんでいるようにも見える?!!そこが違つたのである?!

ただし、誤解されては困るが、多くの人の努力や鍛錬の無意味さを述べているのではなく、今まさに、そうしたものを越えた(超越した?)若者達がいる(出てきている?)!そういうことを、素直に驚きたい、歓迎したいということである!

『改めて、「了」の意味を問う！』

先に、I氏の方から、「ID問答」形式の論稿(記事)作成は、一応の締めを行ったことが示されたが、ここでは、その最後に記された「了」の意味について、私堂本の方からも、思うところを、少し補完(敷衍?)しておきたい!ただし、これは、ただ単にそれを補うということではなく、私堂本の方からの、心からの返答?ということである!

何を二人で戯れているのだという、お叱りもあるであろうが、まさに、この「ID問答」(形式)は、I氏の、それこそ「意地?」と「浪漫?」の為せる業であり、仰々しく言えば、彼の、言わば「プライド」、否、「セルフ・ダイグニティ」でもあるわけである!ちなみに、前者は「誇り・自尊心」、後者は「自己」の威厳・尊厳」という日本語ということだろうか(I氏は、後者の言葉と出会った時から、何故か、そちらの方を大切にしている?)!!

もちろん、俗世?においては、どちらでもよいのである(双方向共に、自らが抱く自意識であることに違いない)、前者が「見栄や虚栄」、後者が「品位・品格」、そして、前者は、外(他人)、後者は内(自分自身)に対する発動というようなニュアンスもあり、I氏は、後者の方を、好んで使用しているということである!!

いずれにしても、人間は、その自意識の発露として、「プライド(誇り・自尊)」や「ダイグニティ(威厳・尊厳)」を持つものであり、それがなくなると、単なる生き物(死んではないという存在)となる!ただし、そういうことは、他ならぬ自分自身が思うことであり、他人が、どうこう言うことではない!!

とは言え、そういうことを論ずること自体が不遜であり、ある意味では、そういうことが出来ること自体が、恵まれし者?の、それこそ「見栄や虚栄」なのかもしれない!老いていく者の「了」の意味には、そういうことが被さっている!!そういうふうにも思うのである!

短歌に託して「我が書き記す」と「の意味」

・問答に 千々に寄せにし 我が思い
如何なる形で 次を求めむ!!

・ふと思つた? 我が書きモノの 行く末!!

PC/USBのは 誰が消す?

・予定を替えての 我が書きモノ
記したきは 若者達の 新たな時空!!

・「了」と書く 思いの先に 何がある?
実はそれは 老いの生(所為?)!!

特別コーナー「堂本彰夫の古代史旅枕⑧」

○新たな「旅枕」?「宮地嶽神社」の謎は見えるか!!

さて、「旅枕」と称しながら、そうした風情は一向になく、少々焦つていたところであるが、近々、その「旅」が実現しそうである!ここでは、その「旅」自体については触れないが(後日?別途、紹介することにはなるであろう)、実は、このコーナーのテーマ(「老松(神社)」を追う!)と、おそろしく大いに関わってくるであろう?、福

岡県の「宮地嶽神社(及び境内の横穴式石室)」を訪ねることになった!たまたま当地に寄る機会ができて、ちょうどその時(今月28日)、年3回あるという、同神社の古墳の

開陳という僥倖?に与れることになったのである! しかるに、「宮地嶽神社」は、県内でも有数の神社であり(年に2度、境内石段から玄界灘まで真っすぐ伸びる参道の延長線上に夕日が沈む「光の道」で有名)、主祭神が「神功皇后」で、「陪從神」として「勝村大明神」と「勝頼大明神」(あまり知られていない?)が配祀されているという(三神を称して、「宮地嶽三柱大神みやぢうたけさんすゑのおおかみ」と呼ぶらしい!)

詳しいことは、ここでは書けないが、ここで、私が注目したのは、主祭神の「神功皇后」はともかくとして(本筋としては、最重要人物?)、「陪從神」とされる「勝村大明神」と「勝頼大明神」という、耳慣れない(不思議な?)二人の神のことである!別説によれば、「安(阿)部亟相あべのさかむね」(宮地嶽大明神)、「藤(高)高(藤)助磨(高)助磨(勝頼大明神)」、あるいは「宗像三女神」と「勝村大明神」を祀るとも言われているらしい!! 深入りすれば、何ともややこしい?神社のような気もするが、

ここで、改めて気になるのは、「藤」という名の人物(神)である!現在(代)も、まさに「藤」という人が、福岡県にいた(知人にいた)、この「藤」氏?の末裔なのではないかと思つたりもする!!

ということ、このまま「宮地嶽神社」を深掘りしていくと、これまでの、「老松(神社)」への接近が、ある意味遠ざかる恐れもあるが、実は、この神社と、近場の、かの「宗像大社」とは因縁深き関係にあり(前者は、後者の「元宮」だったというような話もある)、そして、その両者(神社)は、件の「老松(神社)」

と大いに関わる?、筑後の「三沼の君↓筑紫の君?」が庇護(進出?)した神社であることも、間違いないさうなのでもある!!

しかも、その筑後には、他ならぬ「藤(藤)大臣」という人物もおり(武内宿禰ではないかとも言われている)、先の「陪從神」(藤)氏?のことが、俄かに頭を過るわけである!!であれば、その「三沼の君↓筑紫の君?」が、「大善寺玉垂宮」や「高良大社」の創建を担ったことは、これまた事実のようなのであり、かの「空白の4世紀」の重要な場所と見做される「北部九州」の実態が、そこからも、見えてくるかもしれないのである!! (堂本) 今回は、いつにもまして、過去を振り返ること(モノを通して?)が多かったが、それは、裏を返せば、新たなモノを得る機会が、やはり少なくなっているからであろう!!ただし、古代史においては、偶然の機会であるが、「宮地嶽神社」(間接的には「宗像大社」)にも視野を広めることが出来そう、大いによかつたと、一人(否、二人?)喜んでいてるところである(もちろん、「旅?」自体も、楽しみであることは言うまでもない!) (井上/堂本)